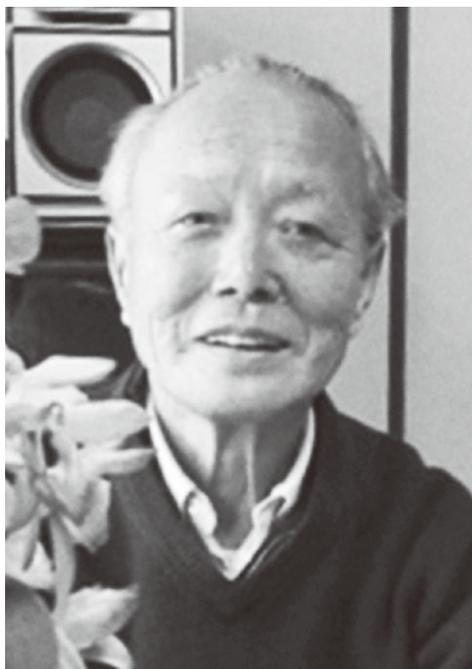


追悼

増田孝一郎先生のご逝去を悼む

小笠原憲四郎



日本古生物学会名誉会員・日本地質学会名誉会員・宮城教育大学名誉教授の増田孝一郎先生が平成25年1月8日に入院先の仙台の病院にてご家族に看取られながらお亡くなりになりました。享年85歳でした。先生は3年程前に「肺がん」が発見され抗がん剤の治療を続けておられました。昨年11月に体調を崩され入院され、年末年始にはご回復の兆しでしたが、肺炎で急逝され、唯々残念です。

先生は「ペクテンの増田か・増田のペクテンか」と言われる程 Pectinidae・イタヤガイ類貝類の分類と古生物学では世界的業績を残されました。これまでの出版論文等は100編以上にのぼり、その質量とも抜き出た感があります。先生の学位論文 Tertiary Pectinidae of Japan (Sci. Rep., Tohoku Univ., 2nd Ser. (Geol.), vol. 33, p. 117-238, 10 pls., 1962) と、その前後の数十篇に及ぶホタテガイ類化石の研究論文は、これまでに類を見ないほどの内容と数で、世界中の化石研究者を唸らせました。先生が在外研究員で1年間滞在されていたカリフォルニア Menlo Park の USGS や Stanford 大学での研究は、日本の化石イタヤガイ類の起源を探る研究の一環でありました。ここで先生が研究の刺激を受けた W. O. Addicott 博士や J. Hopkins 博士、さらに Prof. M. Keen 先生などの話を、後年よく伺ったものです。先生の米国での研究以降は、日

本産新生代の貝類に基盤を置きながらも、世界中のイタヤガイ類化石の研究に発展しております。

先生は静岡県御前崎のお生まれで、秋田鉱山専門学校を卒業され、東北大学理学部地質学古生物学教室に入学、昭和26年に卒業されました。卒業論文で手掛けた能登半島中新統東院内層の層序と貝類化石の研究成果を基に学会に登場し、続いて青森・秋田・山形・埼玉・高知、長崎など次々に日本中の第三紀層からの化石群集を研究報告されました。特に仙台付近新第三系の貝類研究シリーズではホタテガイ類だけでなくカガミガイ *Dosinia* などの新たな新種を次々と記載され、日本新生代貝類の系統分類学に多大なる貢献をされています。先生は1967年に「日本第三系の貝類化石研究」で日本古生物学会学術賞、1971年には「北米の *Patinopecten* と日本の *Mizuhopecten* の比較研究」で日本古生物学会論文賞を、それぞれ受賞しておられます。また、野田浩司先生と共著の Checklist and bibliography of the Tertiary and Quaternary Mollusca of Japan, 1950-1974 は500頁に及ぶ大著として1976に斉藤報恩会特別出版物として刊行されました。これは、畑井小虎・西山省三先生の1952年版に繋がる貝類研究者のバイブルとなっております。

1980年代以降、国際交流や交際研究集会などが盛んになり、先生は韓国、ロシア・サハリン、北米、ニュージーランドやオーストラリアなどを訪れ、多くの研究者と交流を深められました。また、これらの研究を通じて日本産新生代貝類の起源と移動に関する総括をされ、これまでのテチス起源と北方起源の伝統的考えに加え、新たにカリブ海からパナマ海路を経由してマイクロネシア・伊豆-小笠原弧経由の伝播があることを指摘されています。

先生は1960年から1970年代、これまで少なかった子供向けに化石研究をやさしく語った評論社からの単行本「化石とその周辺」(1972年)を出され、日本中の多くの若人に化石研究の夢を大きく膨らませました。この本に啓蒙されて研究者になった者もおります。先生は「化石」や「恐竜」に関する訳本なども出版され、これらの普及本を通じて子供達に化石研究の意義や魅力を伝えてこられました。さらに先生は大学生用の教科書「一般地学」(1986年出版)を分担執筆され、これは多くの大学で使われ、地学教育の手本を示されています。

増田先生は東北大学教育教養部の副手・助手として研究職を得て、助手時代は一貫して畑井小虎先生の幹事長役でした。畑井先生が主査した10数名の博士論文提出者の大半が、増田先生の世話になった事は周知の事実で、優秀な多くの研究者を育てた影の功労者でもあったと思います。東北大学の改組で教育系の分野が独立して1965年昭和40年に宮城教育大学が設立され、先生は、そこで助教授・教授として長らく地学教育の研究と指導に携わられました。また付属学校の校長も務められ、教育者とし

ての先生の素朴で温かい人間性に触れられた方々も多かったものと推察致します。

大学退官後は台湾の地質調査所所長であった地質学古生物学教室OBの黄 敦友氏を通じて2年間台北大学に招かれ、台湾第三系の貝類化石を系統的に整理され研究発表されました。先生が台湾から帰国する直前に、私も家内と友人や若手の研究者とともに台湾を訪れ、先生ご夫妻とマイクロバスと列車で台湾を旅した1週間、本当に楽しく充実した旅でした。また先生は台湾帰国後、地元仙台で斉藤報恩会自然史博物館や仙台市科学館の研究員として長く、地学や化石研究の普及と発展に寄与されてきました。

このように先生の歩んでこられた足跡を辿ると、先生は本当に化石を愛しその魅力を多くの方々に、その意義や研究の楽しさを訴え続け、まさに研究と普及を第一線

で実践されてきました。先生はこのような業績により2010年（平成22年）春に瑞宝中綬賞を叙勲されています。

昨年は奥様を、残念ながら長いご看護の後に亡くされて、先生は大変気落ちされていましたが、抗がん剤治療しながらも東北各地の化石採集などにも積極的に参加し、これまでの採集品の整理登録なども進めておられました。

増田孝一郎先生は目一杯85歳の人生を充実して全うされたものと思います。先生、長らくありがとうございました。どうぞそ安らかに、そしてどうぞ奥様ともども安らかに休みください。ご遺族のご息は、増田俊雄・善雄・市川直美様で、ご住所は、仙台市青葉区旭ヶ丘2丁目25-26です。

合掌

